

河川工事が行われています。

10月1日より河川工事の施工時期となりました。組合でも産卵期・遡上期への影響が少なくなるよう、時期や工法について工事業者と調整を行っています。

ー実施されている工事ー

<国交省>

島田市牛尾、赤松、新大井川橋、向島、宝来町、旭町、細島（サイホン撤去）、焼津市相川

<県> 川口橋、大代川橋

<関東農政局> 島田市身成（本流）

鮎の産卵が始まっています

10月21日午後 大井川、はばたき橋下流（水温21度）



かつては秋になると盛んに見られた鮎の産卵風景。

数匹の鮎が水面に跳ね上がるのを合図に次々と水しぶきが広がっていく様子を、数年ぶりに確認することができました。

（産卵の動画をホームページでも見ることができます。）

機関紙「ぜんない」第33号から

愛しきアユ

第7回



富山県農林水産総合
技術センター水産研究所
内水面課長

田子康彦さんの記事より

全国内水面漁連が発行
する機関誌「ぜんない」の
一部をピックアップして
ご紹介します。

◇アユ仔魚の大名行列が続く秋の夜

十月にもなると日の暮れるのもすっかりと早くなり、川では釣り人の姿もめっきり少なくなります。

川原ではススキの穂が寂しげに風に揺られ、産卵を終えた落ちアユが力なく川底で横たわっている姿を見るにつけ、哀愁がいつそう引き立てられます。あのアユの釣り人たちが賑わった夏の川がまるで夢であったかのように、無常を実感する季節でもあります。

しかし、生を謳歌した親アユたちの死がある一方で、新しい生命も日々誕生しています。アユの子供たち（仔魚）が生まれるのは夕刻。日暮れ時の明から暗への変化を刺激に、川底の砂利の中で孵化します。そして、数時間の内に砂利から出て水面に向かって浮上し、一目散に海へと向かいます。私が行った庄川の調査では、最盛期のその数は一晩に数千万尾。川の流れは複雑で滞筋（みおすじ）がいくつもできるので、アユは一樣に分散するのではなく、おそらく滞筋に沿ってくだっていると思われる。もし川の中を降海していくアユの仔魚たちに光を当てることができれば、そこには目くらむような数の仔魚たちの行列が展開され

ていることでしょう。期間を通してのアユ仔魚の降海数は年によって大きく異なり、数億から70億尾と推定されています。

ところで、庄川やその他多くの河川では、仔魚の降海量と翌年の稚魚の遡上量との間には明瞭な相関関係は認められていません。

例えば、平成16年秋には台風に伴う豪雨で庄川は堤防が決壊せんばかりに増水し、アユ仔魚の降海数は1億尾程度と推定されましたが、翌年、アユの稚魚は大挙して川に遡上してきました。逆に大量に稚魚が遡上した年には、産卵親魚が多く残って秋の降海仔魚数も増えますが、必ずしも翌年の遡上量が良いとは限らないのです。これはアユに限らず、一年生の魚類に共通することで、アユの場合、海域での生息環境（仔魚の数、水温、餌条件、汽水域の広がりなど）が大きく影響していると考えられます。

人間でも体に良いからといってある物を食べすぎると害になるように、過ぎたるは及ばざるが如しなのでしょう。宇宙空間はバランスで成り立っていると考えられます。

しかし、仔魚の降海量と翌年の遡上量との相関は認められないとはいえ、毎年一定量以上の仔魚の降海量を確保する努力は重要です。産卵場の造成では、その河川のアユの資源量と河川流量とのバランスを考えて、それらに見合った面積で行うべきです。このほか、禁止区域の設定等による産卵親魚の保護という直接的なものだけでなく、日常的な河川流量の増加や河川形状の改善などの努力を続ければ、長期的には毎年十分なレベルのアユ仔魚の降海量が実現するものと信じています。



↑ 孵化直後のアユ仔魚（体長6mm）
秋の夜、川の中では海へ降る仔魚たちの大名行列が続いている。